



宇宙兵物語
今日泊亞蘭
早川書房
(8/15刊・¥1500)

二十世紀に生きる、宇宙の兵士たちの物語——と書いてしまうと、何の面白味もないけれど、実のところ、五〇年代正統SFを微妙にひねった、他にはない雰囲気味わえる。

作家としては、日本SF界の最長老である、今日泊亞蘭が久々に出す、最新短篇集が本書。七七年から八一年までに『SFマガジン』に分載された連作短篇集で、十一篇を収めている。

宇宙兵といっても、これは宇宙戦争の物語ではない。副題に「外惑星野郎ども」とある通り、宇宙の荒くれどもの、さまざまな生き様が語られるものだ。中では、ちょっとした科学的アイデアが使われ、それを軸に話が進むのだが、単なるアイデアストーリーには終らない。人情話が、さりげなく挿入されている点など、いかにも作者らしいところといえるだろう。評者のベストは、郵便機のパイロットの話「ケルベロス嵐の日」、親の敵を追う「薔薇刺しぬ」、宇宙レースの結末「仔山羊たち」。どれにも「泣かせ」が入る。

解説での指摘もあるけれど、今日泊亞蘭の文体は、後に野田昌宏、高千穂遙と受け継がれた、あの口調の原型をなすものだ。実に快調で面白い。